

川柳

重森恒雄

峯 裕見子

選

特選 雨傘の下が私のテリトリー

大津市 金子純子

(評) ちょっと狭そうだけど丁度良い。移動もできるし、いい人が入ってくれることもある。などと言うのは表の意。実はもっと良い場所に陣取り、より大きな傘を広げるのだという隠れている。たたかさを感じる。(恒雄)

特選 アク強い春をしたたか老いてゆく

犬上郡多賀町 清水容子

(評) 春野菜や野草にはアクの強いものが多い。苦みがあったり調理の過程で指を黒く染めたりするのもそのせいだろう。作者は自分の中のアク(しぶとさ)に気づいているようだ。「それがどうした」という声も聞こえるようで、あっぱれな「老いぶり」を感じさせる。(裕見子)

特選 ガチャガチャから私わらって出てきます

新浜二丁目 森口ゆめみ

(評) ガチャガチャから出てくるものは運命的で、自分ではコントロールできない。親ガチャは親を選べないことを言うのだろうか。何であれ私は笑って出てくるのだ。親も子を選べないのだ。仕方ないのだ。(恒雄)

入選 何としても帰ろ帰ろねおとうさん

地藏町 大谷のり子

(評) この切迫した感じは何だろう。どこから帰ろうと言っているのだろう。弱り切った人を抱き起こし歩かせようとしているかのようだ。「何としても」の強さはもちろん「帰ろ帰ろね」のリフレインには痛みがある。(裕見子)

入選 バスに乗り食べるつもりパン一つ

正法寺町 金子君子

(評) バスに乗ったら食べようと、菓子パンを一個バッグに詰める。本当はすぐにも食べたいところだが、バスに揺られ、景色を楽しみながら食べるのは、きつと旨いに違いない。今は我慢だ。バスは来るのだろうか。(恒雄)

入選 やさしい嘘ふえてゆくのね年重ね

大藪町 小南苑子

(評) 自分が他者につく嘘もあり、他者が自分につく嘘もある。また、自分が自分を納得させるための嘘も無いとは言えない。現実の厳しさを和らげるのは嘘しかないのかもしれない。それを受け入れ他人の静けさを感じる。(裕見子)

入選 飲みかけのビール残して友帰る

東沼波町 野口博子

(評) 友が帰った部屋に寂寥感が漂う。飲みかけのビールは何事かがあったと訴えている。もうここには来ないと言い残して、「友」が出て行ったのだろう。いつも残される側は悲しい。(恒雄)

入選 春をぬくゆっくりやさしく根っこまで

犬上郡甲良町 川口利江

(評) 長イモだろ。丹精込めて育てた長い根っこを折ってしまわないようにゆっくりやさしく抜けば、待ちわびた春が全部手の中にある。春をぬくという表現が上手い。

(恒雄)

入選 ルンバ君ダンスしないで掃除して

大藪町 千葉春胤

(評) ロボット掃除機は床に物があったりするとセンサーが感知して微妙な動きをするらしい。それを「ダンス」と言い、人間に対するように呼びかけている作者。十七音字に無理がなく、リズムと明るさがある。

(裕見子)



佳作 紅色の夢をまだ追う余命表

米原市 西尾辰之

佳作 リハビリ送り出しうんと伸びをする

大津市 中島順子

佳作 バス停に座布団残し亀急ぐ

大津市 谷優

佳作 懐かしい町歩きたく車降り

鳥居本町 谷口繁子

佳作 「風」歌う君のギターと楽々園

東近江市 大橋定嗣

佳作 飛魚は悔し涙を流さない

甲賀市 綾口千晶

佳作 もう一度やり直したいあの場面

近江八幡市 西村孝子

《総評》

選者の一人だった、青木十九郎さんが選を降りられました。今回で六十一回目の市民文芸では、大変永きにわたりご尽力された選者でした。彦根市の川柳部門にとって一時代が過ぎていくことになりました。そういう時代の変化もあつてか、投句数が昨年よりも随分減りました。寂しい市民文芸となりましたが、新たに投句していた方もあり、いい句も多数ありこれからも、川柳という文芸を、つないでいきたいと思います。

来年もよろしくお願いいたします。

重 森 恒 雄

川柳は、たやすく作ろうと思えば作れてしまう短詩かもしれませぬ。新聞の見出しのような句や交通標語みたいな句も十把ひとからげに川柳と呼ばれているのが現実です。

しかし、あえて大まかに定義づけるとすれば、川柳は根本に批評の精神があり人間そのものを詠む文芸です。また、その柱に据えるのは「私」です。「こうありたい理想の自分」を書いてもいいのですが、「こんなふうにしかな生きられない自分」でもいいのです。

激しく動き変化する時代の中で自身を含む人間を見つめ、ユーモアを忘れず、ことばに敏感でありたいと思っています。作品を寄せてくださった皆さんに感謝を。

峯 裕 見 子

選者吟

欲しい物ばかりのカタログが濡れる

重 森 恒 雄

ざらざらの石に刻んである一句

峯 裕 見 子

